

小西 甚一著「古文の読解」

ちくま学芸文庫 筑摩書房 2010年2月10日刊を読む

むかしの暮らし

「プロフェッサー・コニシ。おどろきましたよ、あの時にはね。何しろ人力車でかけつけたものだから……。」

話し手は、親しいアメリカ人教授。何におどろいたのかというに、ニューヨークの舞台で人力車が登場したからである。もっとも、それだけなら、珍事とは言えないかもしれないけれど、人力車に乗って登場したのが、佐野源左衛門常世、すなわち能『鉢木』のシテなのだから、日本文学に精通している彼が眼を白青させたのも無理はない。この能？の演出者は、常世がキャディラックで鎌倉にはせ参ずるのはおかしいから、何に乗せようと大まじめに苦心したあげく、人力車を思いついたのである。観客の多くは、なるほど日本的な芝居だと感心したらしいが、われわれだって、これと同様のことを古典の世界でやっていないわけではない。

「とんでもない」といわれるような誤解は、すべてをことばだけで片づけようとするところから生じるのであって、実際の生活を知らないばあい、どんなに滑稽な時としては悲惨な勘ちがいが大まじめで演じられるか、容易に想像していただけるかと思う。ところが、てんで「実際の生活」を知らず、むやみに「ことばだけいじりまわす」勉強のしかたが、いわゆる古文の世界では、大変有力なのではなからうか。そこで、わたくしは、古文の勉強を、平安時代の生活から始めることにした。フランス文学を勉強するのに、パリの生活を知らなければ、たぶんお話にならないだろう。古文も同じことだ。

P18

- 2010年2月13日 林明夫記 -